

〈原著論文〉

ファッション・リスク懸念におよぼす装着スタイルの影響

Perceived Fashion Risk and the Influence of Styles of Dress

諸井 克英 松本 ほのか*
(Katsuhide MOROI) (Honoka MATSUMOTO)

Abstract: The present study explores the influence of styles of dress on perceived fashion risk. Photographs of a skirt were shown to female undergraduates ($N = 226$). The two kinds of skirts photographs (“casual” fashion style and “girly” fashion style) were collected from several internet fashion sites, and the length of the skirt was manipulated to “short” and “long”. Participants then completed the Perceived Fashion Risk Scale, imaging wearing the skirt in the lecture room. The factor analysis (maximum likelihood estimation, promax rotations) for the scale indicated six factors. According to the results of the multivariate analysis of variance (perceived fashion style risk as a factor within the subject; fashion style and length of the skirt as a factor between subjects), perceived fashion risk was shown to be a not-necessarily dispositional factor.

Key words: perceived fashion risk, fashion style, casual fashion style, girly fashion style, multivariate analysis of variance.

I. 問題

神山(1996)によると、被服行動は次の3つの社会・心理的機能をもつ。a) 情報伝達機能(他者に何かを伝達する)、b) 自己の確認・強化・変容(自分自身を確認し、強め、あるいは変容する)、c) 社会的相互作用の促進・抑制機能(他者との行為のやりとりを規定する)。わが国でも、被服行動を支える心理的メカニズムに関する様々な研究が行われている(高木(監修)・神山(編), 1999; 諸井・鈴木・染谷・平田, 2001など)。

また、様々な社会調査で被服行動の変容が見出されている。例えば、女子学生とその母親を対象に日本衣料管理協会が行った調査によると(日本衣料管理協会, 2017)、母親と比べて女子学生は次のような特徴を示し

た。a) コートやジャケットの購入時にシルエットやデザインを重視、b) 流行デザインに若干固執、c) 古着ファッションを利活用。また、20代から60代を対象にしたインターネット調査(楽天インサイト株式会社, 2019)を見ると、20代女性の61.8%がSNS(Instagram)をファッションの情報源にし、46.1%がファッション・アイテムの選択時に配偶者や恋人からの印象を重視していた。このように若年女性のファッション行動や意識に関する独特な面も抽出されている。本稿では、最近注目されているファッション・リスク懸念(神山・高木, 1987など)に焦点をあて、その概念の吟味を試みる。

Robertson(1970)は、消費行動における製品に対する知覚されたリスクに注目した。つまり、当該製品の購買決定における購買躊躇要因(知覚されたリスク)を明らかにしようとした。Robertsonによれば、購買状況における知覚されたリスクは、a) 製品の性能に関係した

同志社女子大学生生活科学部人間生活学科特任教授
*人間生活学科 2020 年度卒業生

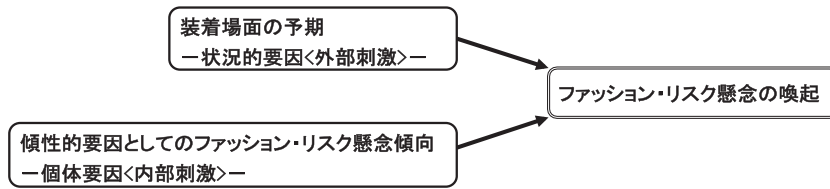


図1 ファッション・リスク概念の2面性

機能的リスクと、b) 製品が幸福感や自己概念を高めるかに関係した心理社会的リスクに大別される。この知覚の差異が様々な消費行動をもたらすのである。神山・高木(1987)は、被服に関する消費行動に絞り、このような場合のリスク知覚つまりファッション・リスク懸念を個人差として捉え、その個人差を測定する尺度を作成した。その後、この懸念を中心として様々な研究が試みられた。

ところで、このファッション・リスク概念は、a) 元々個人の中に形成された傾向なのか、b) 購買対象や状況によって喚起される傾向なのかは、曖昧である。この区別を図1に表した。a) の場合には(図1では個体要因)、心理学における伝統的概念である性格として扱われ、当該個人が元々抱えている懸念の状態に対応させて製品購入を動機づけることになる。対照的に、b) の場合には(図1では状況的要因)、当該製品が懸念を喚起することを抑えることが重要となる。

この問題は、性格に関する一貫性論争に対応している。性格は、「各個人に特有の、ある程度持続的な、感情・意志・認知の面での傾向や性質」(新村, 2018)と一般的に定義される。この性格に関する心理学的な捉え方として次の2通りの基本的方法がある。a) 性格類型論〈「一定の原理に基づいて、典型的な性格を設定し、それによって多様な性格を分類」する方法〉、b) 性格特性論〈「一貫して出現する行動傾向やそのまつまり」である特性を構成単位とし、各特性の組み合わせによって人間の特徴を記述する方法〉(杉若, 1999)。いずれの立場にせよ、性格は当該個人の中に醸成された心理学的システムとして伝統的に位置づけられてきた。しかし、渡邊・佐藤(1994)によれば、このような伝統的仮定に対して疑問が投げかけられ、所謂「性格における一貫性論争」が起きた。つまり、性格に関する伝統的仮定のために次の2基準が充足される必要がある。a) 継時的安定性(時間が経過しても行動に現れる規則性が大きく変化することはない)、およびb) 通状況的安定性(当該個人を取り巻く環境が変化してもその規則性が持続する)。

本研究では、ファッション・リスク概念を性格と同様の個人的傾性として捉えるよりも、当該状況によって左右される状況的概念としての可能性を探索した。ここでは、スカート装着に限定してファッション・リスク懸念の喚起が異なるかを検討した。

II. 方法

1. 調査対象および調査の実施

京都府内に位置する女子大学における社会心理学関係の講義の受講生を対象に、応答システム「マナビー」を利用して調査を実施した。(2020年6月1日~18日)。システムの性質上匿名性には欠けるが、a) 実施にあたって結果を全体として処理し個人ごとに回答を問題にしないことやb) 成績と無関連であることを強調した。

質問紙に対する回答を事前チェックし、以下に該当する者を予め除いた。a) 青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)、b) ファッション・リスク懸念尺度に完全回答しなかった者。その結果、残りの226名を分析対象とした(1回生198名、2回生11名、3回生10名、4回生7名)。回答者の平均年齢は19.52歳($SD = .84$, 18~23歳)であった。

2. 質問紙の構成

質問紙では、回答者の基本属性に加え、画像付きの想像場面を操作した教示文を呈示した。その上で、想像した場面でのファッション・リスク懸念尺度への評定を求めた。

(1) 想像場面の操作

本研究では、スカートを対象とし、「系」と「丈」の要因を操作し、それぞれ2条件ずつ設けた(表1)。

取りあげた「系」は「ガーリー系」と「カジュアル系」である。「ガーリー系」とは、英語表記は「girly」であり、女の子らしいかわいさを全面に出したデザインの服である。リボンやフリル、レースやシフォン、小花柄や水玉柄を特徴とする。「カジュアル系」は、軽装で堅苦しさがなく、形式にこだわらないスタイルである。

表1 呈示したスカート写真

〔系〕	〔丈〕	
	ショート	ロング
カジュアル系		
ガーリー系		

インターネット媒体から2つの「系」でスカート画像を採取した。その際、それぞれの「系」で「丈（ロング、ショート）」についても設定した。実際の呈示のための選別作業を行ったが、コロナ禍のため「マナー」を用いざるを得なかったため、各条件（2×2）1つの画像に限定した。

回答者には、まず次の教示を与えた。

「あなたは、日曜日に仲のよい同性の友だち数人と繁華街にショッピングに出かけました。地下街にある洋服店でいろいろ服を見ていたところ、スカートが目がとまりました。試着したところ、サイズもぴったりでした。値段も手頃だったので購入しました。

あなたが購入したスカートが添付ファイルに示してあります。この添付ファイルをクリックしてスカートの画像を確認してください。」

この教示後、4条件のうち1つのスカート画像のみが呈示され、このスカートの「系」について具体的に説明させた。その後、次の場面を想像させた。

「次の月曜日は、あなたは今通っている大学の2限目と3限目の授業に出席しなくてはなりません。女子大学なので、授業時の受講生は全員女性です。2限目の授業も3限目の授業も学科に限定されていない授業なので、受講生の大半はほとんど知らない学生ばかりです。あなたは、大学のすぐそばに住んでおり、徒歩で大学まで通っています。この日の朝は授業

開始時間の3時間前に目が覚めました。大学には、あなたのすまいから30分もかかりません。

あなたは、日曜日に買ったばかりのスカート（添付してある画像のスカート）を早速はいていくことにしました。」

なお、4条件への回答者の振り当ては、回答者の出席番号によって元々設定したいずれかの条件ファイルにアクセスするように指示した。

(2) 想像場面でのファッション・リスク懸念の測定

添付された画像のスカートを履いて大学に行くときに回答者が抱くかもしれないファッション・リスク懸念を測定した。そのために、先行研究（神山・苗村・高木、1993；遠藤、2013）で用いられた項目を整理・検討した。15項目尺度を用いた神山ら（1993）では、因子分析により6因子が抽出された（規範からの逸脱、着こなし、使いこなし、品質・性能、自己顕示、流行性）。遠藤（2013）の研究では、項目が新たに追加され50項目尺度が用いられ、6因子が認められた（おしゃれ懸念、対人懸念、着心地懸念、自己顕示懸念、性的ハラスメント懸念、管理懸念）。

本研究では、これらの項目を整理し、表現修正も行い、44項目尺度を作成した。上述の設定された場面に置かれたときに抱くかもしれない気持ちを各項目について4点尺度で回答させた。（「4. かなり心配になる」、「3. どちらかといえば心配になる」、「2. どちらかといえば心配にならない」、「1. ほとんど心配にならない」）。

(3) 対象とした条件別回答者

最終的にファッション・リスク懸念尺度に完全回答した者の条件別人数は以下の通りであった。a) カジュアル系-ショート条件67名、b) カジュアル系-ロング条件46名、c) ガーリー系-ショート条件67名、d) ガーリー系-ロング46名。

Ⅲ. 結果

1. ファッション・リスク懸念尺度の検討

(1) 項目水準での検討

尺度項目について、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）のチェックをした。その結果、8項目が不適切であった（ $m \approx 1.5$ ：「ski_a_5 性的魅力を与えずぎるのではないか。」、「ski_b_6 面白味のない人間に見えてしまうのではないか。」、「ski_d_5 まわりの人に失礼になるのではないか。」、「ski_e_6 人目を引かないのではないか。」、「ski_e_7 地味すぎるのではない

表2 ファッション・リスク懸念尺度に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転 (k=3))の結果一回転後の因子負荷量

	(a)	(a)	
[I. 他者評価懸念] (r=.51-.73, α=.90)		[IV. 個性発揮懸念] (r=.65-.71, α=.81)	
ski_f_4 品位がないように思われるのではないかと。	.87	ski_a_7 個性を発揮することができないのではないかと。	.76
ski_a_2 積みがないと思われるのではないかと。	.71	ski_a_4 自分らしさが表現できないのではないかと。	.71
ski_e_4 清潔そうに見えないのではないかと。	.69	ski_e_5 自分の魅力を引き立たせることができないのではないかと。	.56
ski_b_4 伝統やしきたりに合わないのではないかと。	.65	[V. 着心地懸念] (r=.62-.70, α=.81)	
ski_d_8 派手すぎると思われるのではないかと。	.63	ski_b_5 リラックスできないのではないかと。	.75
ski_c_3 だらしないと思われるのではないかと。	.61	ski_a_3 体を動かしにくいのではないかと。	.74
ski_c_6 下着が見えてしまうのではないかと。	.53	ski_c_4 着心地が悪いのではないかと。	.63
ski_b_7 デザインや配色が大胆すぎると思われるのではないかと。	.51	[VI. 品質保持懸念] (r=.40-.62, α=.67)	
ski_e_2 まわりの人から変な目で見られるのではないかと。	.50	ski_b_8 手入れが難しいのではないかと。	.98
ski_c_8 まわりの人から愚かに思われるのではないかと。	.49	ski_d_2 型くずれしやすいのではないかと。	.47
[II. 流行遅れ懸念] (r=.62-.84, α=.91)		ski_a_6 汚れやすいのではないかと。	.41
ski_a_8 流行に鈍感だと思われるのではないかと。	.94		
ski_e_3 流行に疎いと思われるのではないかと。	.90		
ski_b_1 すぐに流行遅れになってしまうのではないかと。	.81		
ski_e_2 趣味やセンスが悪いと思われるのではないかと。	.60		
ski_a_1 おしゃれに見えないのではないかと。	.46		
[III. 調和懸念] (r=.70-.79, α=.88)			
ski_d_4 手持ちの服やアクセサリとコーディネートしにくいのではないかと。	.88		
ski_d_1 既に持っているものと組み合わせにくいのではないかと。	.84		
ski_e_7 着こなしが難しいのではないかと。	.69		

	I	II	III	IV	V	VI	
[因子相関]	I	***	.54	.49	.38	.46	.17
	II		***	.56	.48	.24	.14
	III			***	.36	.29	.29
	IV				***	.31	.08
	V					***	.23

N = 226

初期因子固有値 > 1.04; 初期説明率 69.01%

適合度検定: $\chi^2_{(204)} = 365.53, p = .001$

(a) 当該因子における回転後の因子負荷量

r: 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値; α: Cronbach の信頼性係数値

か。], 「ski_e_8 若者にふさわしくないのではないかと。], 「ski_f_1 肩が凝るのではないかと。], 「ski_f_2 冒険心や遊び心にかけるのではないかと。】。

(2) 因子分析の実施

次に、残りの36項目を対象に因子分析(最尤法, プロマックス回転 < k = 3)を行ったところ、初期解での初期共通性も適切であった (> .33)。初期因子固有値 ≥ 1.00 を基準に 2~8 因子解が算出可能であった。a) 特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値 ≥ .40), b) 他因子への負荷が小さい (絶対値 < .40) という基準を設け、各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように項目を削除しながら a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。最終的に 6 因子解で解釈可能な因子パターンが得られた (表2)。

先行研究(神山・苗村・高木, 1993; 遠藤, 2013)で抽出された因子を参照しながら、6 因子を解釈した。第 I 因子は、まわりの者からの評価を表す項目の負荷が高く、「I. 他者評価懸念」と命名した。第 II 因子で負荷が高い項目は、流行との乖離の怖れを示しており、「II. 流行遅れ不安」と名づけた。第 III 因子では、他に身につけているものとの不調和を表す項目の負荷が高

く、「III. 調和懸念」とした。第 IV 因子は、自分らしさを消失させる不安を示す項目から成り、「IV. 個性発揮懸念」と呼ぶことにした。第 V 因子は、身体に対する圧迫感を表す項目の負荷が高く、「V. 着心地懸念」と命名した。手入れに関わる項目が強く負荷している第 VI 因子は、「VI. 品質保持懸念」と名づけた。

以上の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準(絶対値 ≥ .40)に項目を選別し、これらの下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1 次元性の確認を行い(項目-全体相関分析, α 係数: 表1), 構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

2. ファッション・リスク懸念に関する混合要因分散分析

ファッション・リスク懸念下位尺度 6 得点を被験者内要因、スカートの「系」と「丈」をそれぞれ被験者間要因とする混合要因分散分析 (6 × 2 × 2) を行った (表3-a, 3-b)。ファッション・リスク懸念の主効果、系の主効果、および 3 種類の交互作用効果 (ファッション・リスク懸念 × 丈, ファッション・リスク懸念 × 系, ファッション・リスク懸念 × 丈 × 系) が有意であった。

ファッション・リスク懸念の主効果は、懸念の喚起が側

表 3-a ファッション・リスク懸念に関する条件別平均値

系	丈	N	[I_他者評価懸念]		[II_流行遅れ懸念]		[III_調和懸念]		[IV_個性発揮懸念]		[V_着心地懸念]		[VI_品質保持懸念]	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
カジュアル	ショート	67	1.85	0.70	1.70	0.71	1.86	0.91	1.67	0.73	2.58	0.86	1.47	0.47
	ロング	46	1.52	0.55	2.03	0.88	2.03	1.05	1.83	0.77	2.42	0.79	1.63	0.58
ガーリー	ショート	67	2.10	0.68	2.26	0.86	2.42	0.93	2.01	0.87	2.47	0.89	1.95	0.70
	ロング	46	1.51	0.49	1.83	0.75	2.51	0.79	1.80	0.71	2.14	0.79	2.39	0.74
全体		226	1.79	0.67	1.96	0.82	2.19	0.96	1.83	0.78	2.42	0.85	1.83	0.71

表 3-b ファッション・リスク懸念に関する混合要因分散分析（ファッションリスク懸念×丈×系）*の結果

ファッション・リスク懸念の主効果**	$F = 40.69, df = 4.23, 938.34, p = .001$
ファッション・リスク懸念×丈の交互作用効果**	$F = 11.72, df = 4.23, 938.34, p = .001$
ファッション・リスク懸念×系の交互作用効果**	$F = 13.99, df = 4.23, 938.34, p = .001$
ファッション・リスク懸念×丈×系の交互作用効果**	$F = 4.62, df = 4.23, 938.34, p = .001$
丈の主効果	$F = .59, df = 1, 222, ns.$
系の主効果	$F = 9.49, df = 1, 222, p = .002$
丈×系の交互作用効果	$F = 2.20, df = 1, 222, ns.$

*ファッション・リスク懸念：被験者内要因；丈，系：被験者間要因

**Greenhouse-Geisser による修正

面によって異なることを示しており、「V. 着心地懸念」が最も高く、「I. 他者評価懸念」が最も低かった。系の主効果は、「ガーリー系」スカートの装着のほうが、「カジュアル系」スカートの場合よりも懸念が高くなることを意味している。しかし、ファッション・リスク懸念×系の有意な交互作用効果によると、このような系の主効果が「VI. 品質保持懸念」や「III. 調和懸念」の場合に顕在化する。また、ファッション・リスク懸念×丈の交互作用も有意であったが、「I. 他者評価懸念」や「V. 着心地懸念」ではショート・スカートのほうが、「VI. 品質保持懸念」では逆にロング・スカートのほうが懸念の高まりが生じることを示している。ファッション・リスク懸念×丈×系の有意な交互作用によれば、3つの要因が交絡して特殊な傾向を生じることになる。

IV. 考 察

本研究の目的は、ファッション・リスク懸念概念の状況的成分の可能性（図1）の吟味にあった。つまり装着するファッションによってファッション・リスク懸念の喚起が異なるかを想像場面を設定して検討した。混合要因分析によって得られた系の有意な主効果や、「系」や「丈」とファッション・リスク懸念との有意な交互作用効果は、この懸念が当事者が置かれている状況によって左右されることを示しており、本研究の目的は一応達成

されたことになる。

ところで、本研究では、「カジュアル」系と「ガーリー」系の2種類のスカート画像を用いたが、場面の想像時に「系」を正確に認知しているかを確認した（「このスカートはどのようなファッション系に属するか、知っていますか。その名称を記入してください。」）。呈示された「系」名称を正確に記入した者は1/3であった（75名/226名）。そこで補足分析として、ファッション・リスク懸念を被験者内要因、「系」の正確さを被験者間要因とする混合要因分散分析を実施した（正確に認知した者：カジュアル系-ショート条件22名、カジュアル系-ロング条件19名、ガーリー系-ショート条件23名、ガーリー系-ロング11名）。系の正確さの主効果（ $F = 1.80, df = 1, 224, ns.$ ）やファッション・リスク懸念×系の正確さの交互作用効果（ $F = 1.79, df = 4.26, 954.55, ns.$ ）はいずれも有意でなく、ファッション・リスク懸念の主効果（ $F = 33.81, df = 4.26, 954.55, p = .001$ ）のみが有意であった。したがって、本研究では、「系」の名称に関して曖昧であることが懸念に影響をおよぼすことはないと判断した。

これは、本研究で用いた2つのファッション・スタイルは、ファッション名称を知らなくても日常的には女子大学にとって身近なスタイルであることに起因するかもしれない。つまり、「系」についての知識の有無がどのような影響があるかも今後検討すべきであろう。例え

ば、諸井・花高・尾鳥(2010)は、女子大学生が読みそうな女性ファッション誌37誌(調査時点で公刊)を呈示し、女子大学生に読書経験を尋ねた。主成分分析によってファッション誌が5種類に分類されることが明らかになった(カジュアル系, ギャル系, お姉系, 海外セレブ系, ライフスタイル系)。板垣・諸井(2011)も同様の方法で若干異なる4側面を抽出した(カジュアル中心志向, お姉系・カジュアル, ギャル系, コンサバ・エレガンス系・ストリート・カジュアル)。女子大学生にとってあまり身近ではないファッション・スタイルの服装装着場面を想像させた場合, どのような差異がもたらされるかも確かめる必要がある。ちなみに, 遠藤(2013)の研究では, 4場面(就職面接, 同性友人と遊ぶ, 恋人とデート, 大学通学)が被験者間要因として操作されている。しかし, 本研究のように混合要因分散分析ではなく, 抽出されたファッション・リスク懸念ごとに分析している。

ところで, 本研究では, 購入したスカートを装着して大学での授業に出席する場面を想像させた。この場面は回答者にとっては馴染みがあるといえるが, 遭遇場面の違いがファッション・リスク懸念にどのような影響を生じるかは問題にしていない。しかしながら, 場面がもつ様々な特性が懸念にどのように影響するかも重要である。例えば, 廣岡(1995)は, 他者との相互作用が営まれる社会的状況の認知に注目した。男女大学生を対象として, 日常的に遭遇する可能性のある30個の状況を呈示し, 類似性判断や特徴評定を行わせた。多次元尺度解析(INDSICAL)によって, 親密性, 課題志向性, および不安という状況認知の3次元を明らかにした。したがって, 遭遇場面の次元の特徴も踏まえながら, ファッション・スタイルがファッション・リスク懸念におよぼす影響を引き続き検討する必要がある。

本研究で用いられた2つのファッション・スタイルはストリート・ファッションに含まれる。渡辺(2011)は, 実際のストリートを軸にして若年女性のファッションを観察し, a)「かわいい」という美意識, b)自由なレイヤードによる新しい着こなし, c)消費者のイニシヤティブという日本の若年女性の特異性を見出した。これは, まさに「絶えることなくスタイルの自由を更新し続ける若者たちの運動の歴史」(アクロス編集室(編), 1995)の一端でもある。2つのファッション・スタイルに戻ると, 実際の生活で単一のスタイルに固執することなく, 渡辺が認めた3つの特異性と対応し自分に合うように組み合わせる可能性もある(自由なレイヤード)。

さらには, 強く意識されるのは, ストリートで遭遇する未知の人々の場合もある。このような中で, ファッション・リスク懸念がどのような役割を果たすかを探ることも興味深い課題であろう。

〈付記〉

(1) 本報告は, 第2著者の松本ほかが第1著者の下で卒業研究(人間生活学科2020年度卒業論文)のために立案・実施した研究に基づいている。第1著者が再分析を行った。

(2) データの統計的解析にあたって, IBM SPSS Statistics version 27.0.0.1 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- アクロス編集室(編)1995『ストリートファッション1945-1995-若者スタイルの50年史-』PARCO
- 遠藤健治 2013 被服による自己呈示とファッションリスク 青山心理学研究, 13, 1-12.
- 廣岡秀一 1985 社会的状況の認知に関する多次元的研究 実験社会心理学研究, 25(1), 17-25.
- 板垣美穂・諸井克英 2011 化粧リスク懸念尺度の作成と妥当性の検討 生活科学(同志社女子大学), 45, 12-19.
- 柏尾眞津子・箱井英寿 2008 大学生における知覚されたファッション・リスクと時間的展望との関係 繊維製品消費科学, 49(11), 765-776.
- 神山 進 1996 装う-被服による装飾・整容・変身行動- 中島義明・神山 進(編)『まとう-被服行動の心理学-(人間行動学講座第1巻)』朝倉書店 24-45頁.
- 神山 進・高木 修 1987 ファッション・リスクに関する研究(第1報)-'知覚されたファッション・リスク'の構造- 日本衣服学会誌, 31(1), 32-39.
- 神山 進・苗村久恵・高木 修 1993 “知覚されたファッション・リスク”にもとづく商品分類の提案-女子の衣料品/お洒落要因について- 繊維製品消費科学, 34(1), 29-40.
- 諸井克英・花高亜紀・尾島智美 2010 女子大学生におけるサブカルチャーに関する社会心理学的研究(I)-恋愛観, 被服志向性, 女性ファッション誌接触傾向の関連- 学術研究年報(同志社女子大学), 61, 91-102.
- 諸井克英・鈴木弥生・染谷知雅・平田幸恵 2001 被

- 服イメージ判断におよぼす被服志向性の影響 人文論集 (静岡大学人文学部), **51(2)**, 1-31.
- 日本衣料管理協会 2017 『「ファッションに対する価値観に関する調査」-調査結果概要-』 [<http://www.jastal.or.jp/pdf-data3/topics-h28.pdf>]
- 楽天インサイト株式会社 2019 『ファッションアイテムは「ショッピングモール」「インターネット通販」が主な購入場所に ファッション情報は女性20代の6割以上が「SNS (Instagram)」から-ファッションに関する調査-』 [<https://insight.rakuten.co.jp/report/20190315/>]
- Robertson, T. S. 1970 *Consumer behavior*. Scott, Foresman and Company. 河村豊次 (訳) 『消費者行動の科学』1973 ミネルヴァ書房
- 新村 出 (編) 2018 『広辞苑第七版』岩波書店
- 杉若弘子 1999 「性格」「性格類型論」「性格特性論」中島義明 (編) 『心理学辞典』有斐閣
- 高木 修 (監修)・神山 進 (編) 1999 『被服行動の社会心理学 -装う人間のころと行動-(シリーズ 21 世紀の社会心理学 8)』北大路書房
- 渡辺明日香 2011 『ストリートファッション論-日本のファッションの可能性を考える-』産業能率大学出版部
- 渡邊芳之・佐藤達哉 1994 一貫性論争における行動の観察と予測の問題性格心理学研究, **2(1)**, 68-81.

(2021年9月16日受理)
(2021年10月28日採択)